

明治の小説

文學士 高山林次郎

第一 序 論

題して明治の小説と云ふと雖も、明治の小説歴史を述ぶるは吾等の志に非ず。そは今日尙ほ未だ其時に達せざるを想へばなり。

蓋し世の歴史の過程ほど知り雖きは有らじ。表面より是を觀れば、往來消長の跡簡明にして自ら秩序あり、強ち鑑朱の分解を要せざるが如きものと雖、もし其裡面に入りて備に其由來を尋ぬるものは、誰か筆を抛ちて望洋の嘆無からむや。げに社會は一大活物なり。個人下において、之が基礎を成し、國家上に在りて之を統率し、上下を通じて幾十層、各々其品を異にし其性を別つ。若し夫れ其共同の生存を經營し一致の幸福を維持する所以の因縁に至りては、遠くは民族の殊性、國土の情狀に關し、遙くは隨時偶然の事象に係るもの、素より名譽すべからず。其間内外諸般の勢力、相交錯し、同異相離合し、差等相渾融し、前後に嗚呼するもの上下に引接するもの、左支、右吾、一昂、一低、茲に爰然た

る歴史の織文を經緯するに至る。既に成れるものを取りて是を觀れば、黃紫の著落、井然として一絲亂れず、然れども其成る所以の理に到りては梭を投するものと雖も未だ甚だ知り易しとせず。况むや傍觀者に於てをや。

歴史の言ひ難き理未だ茲に盡きず。是を過去に徵するに、人文の過程は猶海波の搖蕩して進むが如し。數十年若くは數百年にして其形勢を一變して所謂「時期」なるものを成すこと、猶彼の海水の一波又一波、進行の節に應じて其高低を更むるが如し。故に歴史は其「時期」に於て小紀元を劃す。當代の事實は一契點に至りて初めて其説明を求め得べしとなす。是を以て史家は其筆を執るに先ち、其將に説明せむとする所の事實の後にありて是の如き契點の明に指摘し得べきものあることを確認せざるべからず。然らざれば彼は單に之れを記述し得るも、決して之を説明することを得べからざらむ。然らば則ち吾等は如何にして是契點、即ち所謂「時期」なるものを知り得べきか。

若し歴史にして果してジョンソンが所謂反動の理によりて進行するものならむには、所謂時期は其兩極端なりと見るべからむ。然れども歴史の擺動には素一定の

限界無し。海波の峯頭が一波徑の長短を以て預め測知し得べきか如きものに非ず。彼の文藝復興と云ひ、宗教革命と云ふが如き當代精神の大運動、はた大昂揚にありては、何人も直に其歴史の意義の重大なるを認ることを誤らざるべしと雖も、其時代の真相をして蔽著ならしむべき事情の未だ全く經過し了らざる時に當りては、何人の烟眼か能く其歴史的『時期』なるを然らざるとを看破し得べき。過ぎ去りたる幾世に比して殊に注意するの價値無きが如き時代も將に來らむとする幾世を待て初めて非常の關係を人文の全過程に有するに至るもの無しとせず。而して是の如き『幾世』の果して經過し了りたるや否やは、絶世の豫言者の史眼を有するものに非ざるよりは誰加之を能くせむや。

吾等は文明史を愛す。殊に形式に於て獨逸の所謂理想派史家の論述に於て取る所甚だ多し。そは史的事實の說明は完全なる演繹法によりて初めて爲さるべきものなるを旨すればなり。然れども這般の事實に於て何實なる根據を有するなからむか。理想派史家と雖も如何にして安じて其大前提に依傍することを得べきぞ。吾等は貧少なる客觀的事實に基きて、妙巧なる一部の史論を草することの甚だ容易なることを思はざるに非

ず。唯是の如き歴史の、自家の哲學主義の説明に終ること、猶ヘーゲル一輩に見るが如きことあらむを憂ふのみ。

さはれ、吾等は茲に歴史を論ずるものにあらず。唯明治小説の歴史は是の如き事情によりて其完成を今日に期すべからざることを讀者に告ぐるを以て足れりとせむ。

然れども、よし三世を貫きて其歴史的意義を究むること能はずとするも、明治の聖世は年を経ること茲に三十。小説文學亦多少の變遷無しとせむや。吾等は將來に於て如何の位置を有すべきかを知る能はずと雖も、過去の歴史が如何に當代の文學に影響せしか、内外時勢と共に推移したる國民の思想の反映として、我文學殊に小説は隨時如何の體度を取らるか。保守の反動と進歩の趨勢と政治宗氣、哲學のそれと同じく、小説の世界に於ても亦如何に相持抗消長したるか、等の問題に向ひてはさすがに説明の途無きに非ず。吾等が本論を草するは、唯這般の經過に對して大體の所見を誌し、かねて他日明治文學史を完成するもの、參考に資せむと欲するのみ。

王政古に復し、知識を世界に求めてより、國民の思想

殆ど其面目を一新し、小説も亦全く舊時の觀を止めず。最近三十年の間、我邦上下の人心を影響したる改革の精神の激烈、且周到なるは、實に古今内外の史上に多く其例を見ざる所なり。然れども事物の變遷は、所詮歴史的發達なり。さらば明治の小説は過去の我文學と如何の關係を有するか。乞ふ吾等をして先づ維新以前の文學を回顧せしめよ。

國民文學は國民的性情の發露せる一の形式なり。吾等は世界人文の歴史に於て各國民族によりて到達せらるべき理想的職能の各々特殊なるものあるべきを信ず。そは民族固有の本性が百般の外物を同化するの作用に於て多少の特質を有することを信じ、而して更に是特質を發揮し、完成することの、其國民によりて尤も有益に、且尤も成功し易き事情あるべきを信ずればなり。蓋し桃李其壤を同うして遂に其樹を同うせず。國民的殊性の中亦自らは是の如きものあらむ。是れ國民心理學の攻究を待て初めて知悉するを得べしと雖も、吾等は各國民族の過去の作業に於て、既に明に是を認めずむはあらず。性の赴く所自ら他の企て及ばざる所あり。恰も一個人が其の性の長する所に隨て其職能を盡すことの、社會に對して最も有益なるが如く、國民各々其

殊性を自覺して是を發揮するは、やがて人道に對して最大なる貢獻を爲す所以にはあらざるか。セミチック民族と亞里安民族と其間に天職の差あること、猶亞里安民族とチュラニアン民族と其間に職能の別あるが如し。其文物の彼に長くして此に短きもの、素より鴨脚の接すべからざるが如く、鶴嘴の斷つべからざるが如し。それ何れを是とし何れを非とせむや。吾等は文學に於ても亦是理を見る。

國民の感情希望を唱ふものは、國民文學なり。國民は是に依りて其慰藉を求め、其安心を樂む。國民の性情に其基礎を有する文學は、永遠なる文學なり不朽なる文學なり。そは國民と其終を共にすべければなり。つら／＼各國文學の歴史を通觀するに、文豪詩傑、名を馳せ聲を傳ふるもの、一時に喧しくして而して永遠に寂しきは、多くは國民の性情を會心せず、私心偏好に任せて當眼を籠絡したるに依る。技巧倫を絶ち、情想亦世に超えて、遂に百年の知己無くしてやむ。亦悲しからずや。吾等は我文壇の今日に於て亦常に是憾無くむばあらず。

要するに我邦の文學は我國民の性情を満足する所のものならざるべからず。是の如きは國民文學として有し

得べき最高の價值なればなり。遍く世界人心に對して平等なる功果を有するものは知らず、凡そ文學の價值は國民的產物として、遂に國民性情の所依たるを免れざるべし。

二千五百年の文明史は一個のチュラニアン民族としての我國民の特質を最も明白に呈露せり。吾等は人種學上の殘量的エツキスなるチュラニアン民族をば、決して、亞里安民族の如く、單一なる人種なりとは思惟せざるべし。さりながら大陸蒙古民族の特質は、均しく是島國人民の殊性たるは疑ふべからざるなり。即ち我國民は實際的なり、現世的なり。是世界を虛偽と傲し迷妄と觀じ、現象以外の彼岸に向て理想的圓滿の淨樂界を想望したる印度亞里安の宗教的觀念の如きは、我國民の夢にだも思ひ至らざりし所。我國人にありては、見得べく、聞き得べきは現實世界を外にして何等の世界あらざりき。由來宗教なるものは主觀的理想を外界に投射したるもの。理想的觀念に乏しき我國人は古來一の宗教若くは神話をだに有せざりき。一の古事記の、やゝ宗教的なるに近きものありと雖も、之を印度希臘羅馬若くは北歐羅巴の諸神話に較ぶれば、吾等は其間に根本的差違あるを認む。吾等の思惟する所によれ

ば、古事記載する所は決して所謂ミントロキイと稱すべからざるものなるに似たり。されば天然を人視し、宇宙を神化し、風雲月露の中に不可思議なる或物を冥想するが如きは、我邦の詩歌に甚だ稀なる所なり。況してや、ゲーテ詩中のモハメットが、日月星辰を望みて之を讚美し、更に是等を以て全能獨一の大威靈に歸せむとしたるが如きは、我邦人の意識する能はざりし所なり。

Hebe, liebendes Herz, dem Erschaffenden dich!

Sei mein Herr du, mein Gott! Du Allliebender du!

Der die Sonne, den Mond und die Steu'n!

Schuf, Erde und Himmel und mich!

是を以て歐洲各國の詩歌は、何れも其起原を神話に發せしに違ひて、我邦の詩歌は直に人間を以て初まれり。神と人とのかけはしとも見るべき英雄の譚の如きも亦我邦に見る能はざりし所なり。

我國民は宗教を有せざると共に、形而上學をも有せざりき。怪力鬼神を語らず、天命上帝を説かざりし孔丘氏の功利的學説は、是島國に於て絶好の知己を發見せりき。夫の天地人間に對して幽玄なる考察を下し、隱微なる感慨を托したる、中古の南歐羅巴に見るが如

き、宗教的、はた哲學的詩歌は、吾國民の知らざる所なりき。是に於てか古事記を外にして一篇の敘事詩を有せざりし我文學は、戀愛、教訓を離れたる一首の抒情歌を有せざりき。

外國の文化は如何の勢力を我人心に及ぼし、か。支那思想は儒教によりて、印度思想は佛教によりて、共に我未開の文化に汎濫したりきと雖も、我國民の同化力に富みたるや、幾もあらずして之を日本化したなり。佛教の如きは、絶大なる政權の幫助によりて殆ど強迫的に傳播せられしにも係らず、印度思想の幽玄深遠なる宗教觀は、乾燥冷淡なる形式主義と、輕薄膚淺なる不合理的厭世の感情を鼓吹したるとを外にして、又何等の注意すべき痕跡を止めざりき。流石に儒教は根柢より我邦人心を薰陶せり。そはチユラニアン民族の血液は、功利教の繁茂すべき土壤に外ならざりければなり。

是を以て、上層より下層に普及するに隨ひて、佛教は漸く非印度的となれるに反して儒教はいよ／＼支那的となれり。中世以後本邦固有の敬神的國風を抱合して、所謂武士道なるものを造るや、其根柢半平として扱くべからず、百載の文物是に胚胎し、永く我歴史上の一大

勢力なりき。武士の面目を維持せむが爲に白刃を踏みて笑て死に就くは我邦人日常の事なりき。而かも眞に佛教擁護の爲に鼎鑊を辭せず、若しくは宗教的熱誠に驅られて生死を顧みざるもの、高僧名衲の二三を外にしてそも幾何ありとするや。單に表面上の事實より之を見るも、現世を度外に附する超絶的、はた神秘的宗教の眞味は、我邦人の知る能はざるものなりしに似たり。

讀者よ、是の如く述べ來りたるが故に、漫吾等を以て我邦文學を輕侮せるものと爲す勿れ。吾等は國民文學の眞價は國民的性情を満足するの多少によりて評定せらるべきものなりと思ふ。文學本來の目的は詮ずる所、人を娛ましむるにあり。吾等は是意味に於て實用を離れて文學の價値を認むるを欲せず。摩訶婆羅多と、羅摩耶那とは、印度亞里安民族にとりては洵に偉大なる詩篇なるべし。然れども、其想像の瑰奇夸大なる、其情感の幽玄神秘なる、チユラニアンなる吾等の到底其蹤跡に依傍する能はざる所、徒に其怪異を驚嘆するを外にして、吾人の希望、安心と相合せざるもの多し。是の如きは吾等が國民の文學として何の價値やある。印度歐羅巴民族の宗教的敘事詩の如きも、彼邦の

文物に心酔せる者流を除きては、我國民的性情と爲す所、甚だ少きに似たり。是亦我文學として極めて價値無きものと謂はざるべからず。昔者ゴットシェット一輩の自國民族の性情如何を顧みず。偏に形式の精透と、情感の華麗とに垂涎して佛蘭西文學の輸入を務めしや。獨乙文學は實に其衰頽の極點に達したりき。是時に當りて若し所謂瑞西派のミルトンに關する抗議なく、クロツプストツクが其メシアスを著はしてテュートン民族の意識に一大反省を促すこと無く、更にレツシツクが『文學書簡』を刊行して國民文學の旗幟の下に全獨乙の文壇を風靡すること無からむには、三十年戰以降の獨乙は何れの時に至りて其『國民文學』を有するを得べかりしや殆ど知るべからず。夫の國民性情の如何を蔑視して、徒に他の雄渾跌宕を稱へ幽玄高崇を賞するものに向ひては身レツシツクに非ざるも吾等『知識ある人夫』を以て之を目せむと欲す。

國民性情の文學に於て重すべきことは是の如し。况むや我國民を以て假りに等しく蒙古民族なりとするも、歴史ありてよりこのかた、是秀麗明媚なる天然の間に涵養せられたるを以て、さすがに大陸蒙古民族の如く、其知鋪張空騫に流れずして着實穩健に、其情乾燥無味

に失せずして清妍婉微に、加ふるに、雄邁の資性と、敏活の機能とを以てす。よしや玄々を夢み、幽冥を想ふの天賦に乏しとするも、熱情至誠の宿する所、何の處にか文學無からむや。春晝窓下百花開くところ、桃紅李白、それ何れを是非すべき。吾等は斷じて言はむ。國民性情の同化し得る所は即ち國民文學の生長し得る所なりと。

餘論はしばらく措く。今我邦小説の發達を顧みるに、西洋諸國と自ら日を同うして論すべからざるものあり。神話に初まり、叙事詩(英雄譚)に移り、傳奇を経、遂に今日の所謂小説に至れるは、おしなべて歐洲に於ける小説發達の次第なり。然れども、神話無く、英雄譚無き我邦にありて、小説の起原として觀るべきもの、上古に於ける二三の巷談、夢野鹿、浦島子の物語及び降りて神佛に關する縁起談、等に過ぎず。延暦遷都以後は、上下の恬熙につれて文運大に開け、拮据價格の漢文鉢を脱して、優雅典麗なる和文に成れる諸種の物語續出せり。即ち竹取物語を初めとして、宇津保、伊勢、住吉、濱松、菰原、とりかへばや等より、源氏を経て、狹衣、多武峰等、其數少からず。殊に源氏、狹衣等に名のみ聞えて其の書傳はらざるものに至りて

は、一々名譽に違わらず。當時佛典漢籍盛に輸入せられ、上流社會の思想を影響すること少なからざりしを以て、是等の物語類は、竹取の如く其趣向を蹈襲するが如く甚しからざるまでも、自然人生に對して多少の悲觀をほのめかさるは無し。然れども其資材とする所は、概ね月卿妻客の私事にして、其骨子とする所は、王公貴人の戀愛談の圈套を出でず。是れ當時の作者も、讀者も、共に皆上流社會の人にして、其經驗の範圍の狹隘なるより生ずるものづからなる結果なるべしと雖も、他方より之を見れば我國民性情の真相の幾分は已に明に茲に呈露せられたりと謂つべし。

進で前後、保平の戰亂より、鎌倉時代に入りては、朝家の式微と共に文學も亦一時大に衰へ、源平盛衰記、平家物語、判官物語等の史談を除きては、小説として見るべきもの、鳴門中將、秋夜長等二三の物語ありしに過ぎず。蓋し藤氏の勢力頓に衰へ、權柄武士の手に移りてより、殺伐武斷の氣風世に尙ばるゝに及び、政治社會の趨勢と共に、文學美術も亦公家戀愛の文縷を離れて、専ら武人干戈の功名を慕ふに至れり。彼の地獄草子の如き『繪巻物』と共に、大江山、戸隱山、鶴退治、鬼一口等の巷談街説の是時代にもてはやされ

しは、蓋し自らなる勢なるべし。然れども天平美術の高妙は最早や運湛諸慶の製作に見るべからざるが如く、源勢二語に見るが如き優雅は永く其跡を絶ちたるが如し。

更に室町時代に入りては、福富、文正、鉢つぎ等の繪巻草子の行はれしものありしが、素より殊に言ふに足らず。當時戰國の積弊を受け、天下の文學は廬に五山の僧徒に依りて其餘喘を保つもの勢なりしを以て、我邦文學の衰頽は是時に於て其極に達したりと謂つべし。是暗黒時代に於て一種の光彩を我文學史上に抛ちたるもの之を謡曲となす。

若し我文學史中に於て佛教文學と稱すべきものを求むれば、そは即ち謡曲なるべし。そも、佛陀教の我邦に渡來せしは、室町時代を去る遠く千有餘年の昔時にあり。而かも無常流轉の人生を悲觀し空靈幽冥の他界を愉快して是厭世宗教の特色を發揮したるに近きものは實に謡曲を以て最となす。何故に佛教は室町時代の最後に於て殊にしかく其影響を文學に及ぼすことを得たりしか。主要なる其理由は極めて簡單なり。蓋し苟も健全なる國民の性情の社會を支配する間は、あらゆる外來の勢力は、之と同化するに非ずむば、何等著

大の感化を人心に及ぼすこと能はざるべし。鎌倉以降、干戈頻りに動き、民心其堵に安ぜず。足利將軍の末路に及びては、累世の積弊は根柢より社會の秩序を搖撼し、細常地に墜ち、淳風美俗又見るべからず。人心離散して又拾收す可らず。久しく烽烟鼓響に戰慄せる國の民は、鬱憂の眼を擧げて齊しく救濟の道を憧憬したりしならむ。是の如き時に當りて世間の無常を説き、有爲轉變の現世を厭離して解脱成佛の淨樂を鼓吹したる謠曲が、一般人心に歡迎せられたるは、蓋し當然の勢ならむのみ。斯の如くにして謠曲は、雪舟、雪村一輩の禪學的繪畫と兩々相並びて我邦文學及美術に於ける佛教的勢力の最高點を標示せりき。

然れども吾等は思ふ。謠曲は眞に我國民性情を代表せるものに非ざると、猶雪村一輩の禪畫が美術的特質を發揮せるものに非るが如きを。吾等は謠曲を以て佛教僧侶が、我國民性情の罅漏に乗じて自家の情感を發露したるものなりとするの、寧ろ至當なるを想ふ。何となれば我國民は決して謠曲中の諸國行脚の僧によりて、其慰藉濟度を受くる亡魂幽靈の如きものに非ざればなり。

任他。謠曲はもと樂器の幫助により、一定の節調に應

じて唱咏するものなるを以て、小説と云はむよりは寧ろ夫の舞本、淨瑠璃草子等と共に音樂的文學と稱すべきものならむ。其他曾我物語、鴉鷺合戰物語、魚島平家、鳥部山、松帆の諸種の物語も室町時代の末に出でたれども、取出で、言ふべき程のものにあらず。

累代の戰亂に倦み疲れたる國民は、徳川幕府の下に三百年の平和を樂めり。是時代に於ける諸般の文學の隆盛は、今更絮説するの要無かるべし。是に於てか小説も亦一新紀元を開きぬ。蓋し今日の概念にや、相應はしき小説の歴史は、實に是時代に初まりしと云はむに敢て過言に非ざるべし。

徳川時代に於ける小説は其種類を言へば凡そ三種あり。即ち所謂浮世草子。所謂讀本、及滑稽本是なり。其時代を云へは假に二期ありとすべし。元祿を初期となし、文化、文政を後期となす。是中、讀本は鎌倉、室町、時代の演義史談より脱化せる實録と、近松以下の院本とを抱和して、更に一部の趣向を構へたるもの。山東京傳、曲亭馬琴等を以て其主なる作者とすべし。滑稽本は俗に所謂草紙より出でたるものにして、繪巻物、御伽草子の系統を引けるものと見るを得べきか。式亭三馬、十返舎一九等をして其作者を代表せしむ。

所謂浮世草紙は古來の物語を繼ぎて資料を俗間に取りたるもの、井原西鶴の作を云ふ。更に作者を以て時代に繫ぐれば、元祿は西鶴の時代にして、文化文政は京傳、馬琴、三馬、一九の時代なり。是他西鶴の餘波を受けて別に世態人情を寫したるもの、爲永春水あり、所謂人情本の作者なり。

若し是時代の小説を精説せむと欲せば、卷を重ね秩を草むるも尙足らじ。今其の二三の要點を指摘せむに、其描寫の様式より之を觀れば、浮世草子、滑稽本は寫實的にして、讀本は理想的なり。其資料の上より之を見れば、前者は事現世に關りて平民的、後者は主として歴史に本きてや、貴族的に傾けり。前者は英語の所謂ノベルに近く、後者は所謂ロマンスに近し。蓋し狹義に謂ふ所の小説と、傳奇とは、小説文學の二大種類なり。人生を觀察する方法の異なるに隨ひて、其描寫の方法亦自ら分れ、茲に外部の經過を主題とする所謂傳奇小説も、内心の作用を對象とする所謂心理小説との別を生ずるは寧ろ自然の勢ならむ。其人生を觀るや、前者は敘事詩の如く客觀的にして、後者は抒情詩の如く主觀的なり。若し一大天才ある小説家ありて、是兩者を熔鑄して一九となし、同時に主客兩觀の過程を示

すこと、猶戯曲に於て見るが如き作を爲るあらば、是の如き小説は形式上理想的圓滿に到達したりと謂ふを得べし。然れども實際の技工上、是の如き筆の到底望み得べからざる以上は、是二種の小説の永く兩端に對立する、亦已むべからざるものあるに似たり。故に吾輩は我一派の批評家が「傳奇小説は死にたり」と絶叫するの大早計なるを信ずるものなり（後章參觀）。

徳川時代にありては馬琴、京傳はロマンスを代表し、西鶴、春水はノベルを代表すと見るべからむ。然れども其完成の程度より二者を觀れば、馬琴の歴史小説が傳奇として我古今の文學史上に獨歩するの偉觀は、百世の瞻仰すべき所なりと雖も、西鶴春水のノベルに至りては、極めて幼稚なるものと謂はざるべからず。若し單に彼等の著作に對して峻嚴なる含蓄的批判を下さば、恐くは彼等は是名稱をだに價値せざるべし。唯吾等のしか呼稱する所以のものは、そが後年小説の發達に對して一縷の歴史的系統を繋住するものあるに依るのみ。

げにや、西鶴が小説家としての眞價は、人情を穿鑿することの精微なるものあるに非ず、國民の情想を發揮することの愷切なるものあるに非ず、はた又一部人生

の運命を描破して趣向の殊に巧妙なるものあるに非ず。只其世態風俗を觀察し、之を筆端に上すに當りて、着眼の銳利敏活に、描寫の逼真輕妙なる他の容易に企及すべからざるものあるが爲のみ。吾等は敢て彼が色欲の消長を直寫したるを以て、人間の煩惱を觀じたるものとなすを拒まざるべし。然れども彼若し寫實家として不朽の名譽を保ち得べしとせば、そは只彼が世態風俗を觀察する着眼の非凡なるに歸すべきなり。何となれば彼の筆にする所の片々は、徒に彼が見聞したる肉慾世界の現狀を直寫したるに過ぎずして、概ね趣向無く、性格無き零碎の巷談街説に外ならざりければなり。

然れども西鶴の着眼及び文辭は、即ち是れ寫實的小説の着眼及び文辭なり。彼の後、江島や、八文字屋の氣質物あり、三馬、一九の滑稽本あり。春水の人情本あり。然れども其觀風の眼光と輕妙の筆致とは遂に遠く彼に及はず。宜なるかな、明治小説の第二期に於て寫實的傾向の一世を風靡する時に當りて、先づ元祿文學の大復興を見るに至りしや。

西鶴一度び寫實の門戸を小説界に啓きてより、其所謂浮世草子は幾多游蕩子の模倣する所となり、其積、自

笑を初として、箕山、鷺水、其角、了意の徒より、下りて田螺金魚、吉田の錦江、振鷺亭等の所謂洒落本の作者に至るまで、競て其流風を學び、多くは遊里教坊の癡情を穿ち、娼婦嫖客の内幕を傳ふるを旨とせり。是等は概ね簡短なる情話にして、素と一部の結構主旨の存するにあらず。文化以後に至りて、小説の風潮漸く一變し、争ひて新奇の事實を結綴して巧に複雑なる趣向を構へ、以て讀者の嗜好を惹かむことを務めたり。是れ素より時尙の變遷に應じたるものなるへしと雖も、是れ素よりして漸く荒唐無稽の譚説を誦訂して婦幼の耳目を娛ましむるの風を生ぜり。是の如く怪奇なる傳奇風の普く小説界を汎濫せむとする時に當り、一種異様の旗幟を擧げて、在來の小説に一大刷新を加へたるものを曲亭馬琴となす。

歴史小説としての馬琴は、世既に定評あり。吾等又茲に之を贅せざるべし。而かも彼れが徳川時代の小説史上に特殊の意義を有するは實に其勸懲主義に在り。蓋し馬琴は素深く儒教の精神に薰染し、常に世道名教を以て事となすもの、文化以後の小説が、競新街奇を之れ務めたるの極、徒に婦幼童蒙の翫具となるに過ぎざりしを見て、深く潜に慨する所あり。其の所謂勸懲主

義は在來小説の品位を高め、以て士人學者の閲讀に資せむとするの主旨に出づ。其作一度び世に行はれ、其該博なる學識と、雄麗なる詞藻と巧妙なる脚色とを以て勸善懲惡の大旨義を鼓吹するや、天下の荒唐なる草雙紙、浮靡なる浮世草子、無趣味なる實録仇討物等に倦厭せる時好は翕然として之に起き、遂に一世の風尙を形成するに至れり。馬琴著す所の稗史小説は、素より其趣向に於て必ずしも前代に優れりと云はず。其寫す所の事實は多く怪奇不自然なるものにして、其描く所の性格も亦鋪張夸大に失するの評を免れず。然れども、理義を以て首尾を貫徹し、到る所寓するに訓誡勸懲の意を以てす。強て道理に拘泥し、事を枉げ、情を矯めて、尙且成案を遂ぐるの嫌なきに非ずと雖も、夫の狂言綺語を以て隨處當眼を喜ばしむることを之れ務め、孟浪、散漫、説く所一致なく、理義無きものに比すれば、遙に優れしものと謂はざるべからず。是に於てか文化初年以來の小説は其面目を一新せり。夫の狹斜洞房の事實を描寫せる鄙俚浮靡の人情本の如きも、勸懲の名義を被るの已むべからざるを以ても、曲亭氏の勢力の如何に廣大なりしかを察するに餘あり。吾等潛に惟ふ。馬琴の著作は尤も健全なる我國民の性

情を代表せるものには非るか。彼が唱道せる勸懲教訓の主義は、主觀的、はた理想的潤色を與へたることによりて大に其小説の意義範圍を狹窄したるの觀無きに非ずと雖も、我國民の現實的はた功利的性情を投射して尤も明晰なるものに非ざるか。是の如き小説によりて慰藉を得、教訓を受くるは、即ち我國民の性情に尤も健全なる進歩の動機を與ふるものには非るか。彼が小説は今日より見れば素より幾多の缺點に滿つ。其の描寫の方法は極めて幼稚なり。其人物の性格は極めて不自然なり。老農故事を説き、估客道を談ず、極めて笑ふべし。強ひて地を作り務めて理を構へ、知を擧げて情を抑へたる更に極めて惜むべし。彼は倒底明治三十年の寵兒に非ずと雖も、其精神主義に對しては我國民は永く彼が知己たるを失はざるべし。殊に彼が描寫したる武士道の如きは、任俠義に勇む大和民族と共に永く埋没すること無かるべし。

遷莫、吾等を以て傾向小説を推獎するものと爲す勿れ。そは別に説あるなり。馬琴小説の勸懲主義一度び時尚を壟斷してより、我小説は殆ど全く淺近なる功利的方便の渦中に沈溺し、所謂純美術的詩趣は蕩然として地を掃ふに至れり。三馬、一九、春水一輩の戯作の

遙に元祿初期の寫實小説に照應するもの無きに非ざり
 きと雖も、是れはた勢力微々として言ふに足らず。是
 の如くにして小説界は大政維新の大關門を越えて古來
 未曾有の新舞臺に入れり。

是を要するに、徳川時代に於ける寫實的小説の萌芽は
 夙に元祿の當時に胚胎したりきと雖も、其成熟を見む
 が爲には數百年の長日月を待たざるを得ざりき。超て
 百年幾多の戯作者人情本作者の世に出づるものありき
 と雖も、未だ老西鶴の遺跡を襲ふに足らず。况むや其
 遺業を紹きて之を進むるをや。西鶴は實に寫實的諷諧
 家として空前絶後の位置を獨占せるものと謂ふべし。
 明治小説の第二期に入るや、春のや、紅葉、美妙諸氏
 は遙に其系統を繼承し、大に寫實小説を振興せり。西鶴
 氏茲に於て初めて其後を待たりと謂ふべし。文化の初
 年浮世草子の血統殆ど絶えてより、傳奇小説盛に出で、
 次で馬琴之を振作し、種彦、仙果等の小摸倣者其後を
 承け、春水、一九一輩と双々相並びて明治の世界に入
 れり。維新前後の小説は殆ど其衰頹の極限に達したり
 しが如し。
 西鶴と馬琴は言ふまでもなく徳川時代の二大小説家な
 り。今其歴史的位置を考ふるに、是二人は酷だ英國十

九世紀小説史に於けるオウステン女史と、タルター、
 スコットのそれ似たるものあるが如し。そも、
 世紀のはじめ、所謂シャコビズム衰へて、時の好尚は
 漸く十八世紀の政治哲學的文學に背きし頃より、茲に
 英國小説の新潮流を催起せりき。ノベル作者として其
 劈頭に表はれしものをオウステン女史となす。女史
 は恰もスコットが十九世紀に於ける英國歴史的小説家
 の父なるが如く、十九世紀に於ける英國寫實的小説家
 の母なり。されど女史の小説が當代を風靡せしにも係
 らず、死後其蹤跡に隨ふものとは殆ど皆無なりき。
 當時國民の嗜好は他に一層有力に且一層通俗なる勢力
 を喚起し、そをして霎時英國小説壇の全權を握らしめ
 たりき。是れ即ちタルター、スコットの創始したる歴
 史的小説なりき。數十年の後は歴史小説の潮流漸く退
 轉し去りたる後に至りて、全く傳奇巷談を離れたる寫
 實的、はた心理的小説は、初めてオウステン女史の後
 を享けて其頭を擡げ、漸く其勢力を回復することを得
 たりしなり。是れ西鶴の開始したる寫實的小説が、一
 時馬琴の歴史小説の爲に厭倒せられ、明治に入りて辛
 やく土を捲て再來したるが如からずや。
 幾度か比較せられたる馬琴とスコットの類似は、大體

に於て吾等も亦認むる所なり。二千年の間、歐洲各國の産出せる歴史的詩歌小説は、其數幾何なるを知るべからず。然れども之を以てスコットが歴々二十年の間に述作したるものに比すれば、螢火の曙光に向ふが如し。是れ猶馬琴が一部の八犬傳、能く本邦古來の物語をして顔色なからしめたるどほ均しからずや。若し夫れ十八世紀の韻文的傳奇に倦み疲れたる英國の社會が、更に浩瀚なるウエーベリーの散文的傳奇を歓迎するを辭せざりし因縁に至りては、固より種々ありと雖も、是老詩人が能くアングロサクソンの國民性情を把握し、道義人情に縁りて之を鼓吹したりしこと、亦其一因ならずはあらず。是れ亦酷だ馬琴に似たりと言ふべし。但其結構の多様に、其人物の自然なる、はたまた其描寫の精緻なる、等に到りては馬琴到底スコットの匹儔に非ざるなり。西鶴は其史上の關係に於てオウステンに較ぶべしと雖も、其特色に於ては寧ろフーエルデイングに酷似せるものゝ如し。

我明治の小説は斯の如き時勢を承けて掘起せられたるものなり。乞ふ章を繼ぎて其變遷の一斑を叙述せむ。

第二 明治小説の第一期

古より改革維新と稱せらるゝ時期を我邦歴史中に數ふれば一にして足らず。然れども、我明治の改革の如く、短日月の間に深大なる變化を致したるものは未だ其例を見ざる所なり。小説も亦社會政治文學の一般の推移に隨ひて、古來未だ嘗て經驗せざりし新潮流に乗ぜしは、素より自然の勢なり。

變化の急激なると、改革の殆ど根本的なるにつれ、我小説は一般社會の事物と共に幾多の異なる局面を経過したり。蓋し舊思想は破壊せられて新思想は未だ成らず。社會人心は未だ其根柢を有せず。國民的性情は新文明の光明に眩惑して未だ自ら省慮するの違あらず。同化の中心的活力は一時殆ど停止して、己を守るの本領なく、自ら立つの脚地無く、一に其指導を外來の勢力に仰ぎたるの時代にありては、社會の風尙嗜好も亦朝暮に改易せらるゝを免れず。若し是際其進退左右に應じて一々其時期を別たば、僕を更ふるも及ぶべからず。且夫れ大勢の趨くところ自ら其軌なくむばあらず。紛雜の間尙一條の理文ありて、將來發達の針路を示すものあり。つらく、這般の情狀を考察し、大小相商り、輕重相較すれば、明治小説の歷程を前後二期に分つを適當とすべきが如し。即ち明治の初年より十八年に至る

まて第一期となし、十八年以降、二十八年頃までを第二期となす。若し夫れ二十八年以下に至りては事最近の過去に屬するを以て今日未だ明に其變遷の蹤跡を分つの時に達せざるが如し。

弘化嘉永このかた、内外の情勢穩かならず。人心洵々として又娛樂を文學にとるの追少なかりき。維新の戰爭漸やく其局を結びしころより、闔國の民心は舊物打破の傾向に驅られて西洋文明の輸入に忙はしく。本邦古來の文學はすべて度外に抛却せられたる有様なりき。西洋文明は明治の初年にありては主として時の英學者によりて紹介せられたるを以て、もつばら英國思想なりしことは、最も注意すべき所なり。

是より先き外國思想の我邦に入れるもに支那、印度の二種あり。儒教によりて代表せらるゝ支那思想は、其實際の傾向の我國情に適するものありしを以て、國民の思想を影響すること甚だ小ならず。一切の文物其感化を受けざるは無かりき。然れども其保守、回顧に傾き、退嬰自滿に安する支那的精神は、必ずしも敏活銳利なる我民性と相應はしと謂ふべからず。其文化を停滞し空形虛式の中に墜巡して、動もすれば過去の舊夢を慕ふて退轉せしむとしたるは所詮主として儒教の及

ぼせる惡結果なるが如し。印度思想に至りては、殆ど根本的に我國民の性情に同じからず。世界に於て最も理想的、はた宗教的ありと稱せらるゝ印度亞里安民族が世界に於て最も實際的、はた非宗教的なりと稱せらるゝ蒙古日本民族に對して、色即是空の妙想を訓へ、寂滅爲樂の玄理を觀せしめむとす、寧ろ木に接ぐに竹を以てせむと欲するに均しからずや。吾等は佛陀教二千年の傳播も、徒に枯淡なる形式主義を馴致し、厖に淺薄なる厭世思想を鼓吹したる外何等較著の効果なきを見て、國民的性情の遂に動かすべからざるを觀するなり。且夫れ現世を蔑視し、彼岸を消悅する佛陀教は、其超絶的の點なるに於て、啻に我國民の性情に背反したるのみならず、孔子教と同じく又大に國民文化の進歩を沮害せり。我邦二千年の歴史が多くの處に於て是の如き非日本的思想に對する國民の無意識的反抗を表示せることは、炯眼なる史家の夙に看破せる所ならむ。

明治維新の初に於て、我邦に輸入せられたる英國思想は、支那印度の思想と大に其面目を殊にせり。若し國民性情に適應するの程度を數量的に觀ば、我はむしろ英國に遠くして支那に近かゝらむ。然れども英國思想

は支那思想の我に反するの點に於て我に一致せり。何ぞや。其進歩的功利主義是なり。アングロサクソン民族は主として亞里安種と屬すと雖も、人種の混和、風土の勢力は殆ど彼をして亞里安民族の主性を失はしめたるの觀あり。彼はテウトン民族の空想を有せず、

羅甸民族の輕浮に染まず、彼は考察を喜ぶと共に其實を尙び、改革を迎ふると共に保守を棄てず。荒唐なる形而上學は彼の知る能はざる所、然れども適切穩健なる常識は彼に於て殆ど他に見るべからざるの圓滿を見る。彼は學問に於ては、實驗を重じ、事業に於ては功利を喜ぶ。一切の文物は現世の幸福を増進するの點に於ては初めて貴重すべしとなす。是功利的且進歩的なるの一事は英國思想の正に我國民性情に吻合する所なり。殊に維新草創の際に於て、國民を擧げて銳意社會の改善國家の富強を企圖する時に當りては、從來支那印度の思想に於て見るべからざりし進歩の主義は、彼等が双手を擧げて歡迎せし所なりき。

是英國思想が改革の餘勢に乗じて進歩の精神を國民の間に鼓舞えつゝありし間に、そが純文學上に及ぼさ、直接の影響の見るべきものとは、甚だ僅少なりしが如し。蓋し詩歌小説の盛に行はるゝには、なべての場

合に於て、其國の富盛にして其社會の平穩ならむを要す。されば維新の際に社會の秩序を回復し、十九世紀の世界の大勢に適應する新文明を移植するの急務に迫り、上下を擧げて政治經濟の改善に熱中せたる時なれば、純文學の如き、物質的生活に須要ならざるものは、

あのづから社會の注意以外に放擲せらるゝに至りしなり。故に明治十年以前の小説は、徳川時代の殘肴冷杯を嘗啜して僅に其餘脈を繋きたるの有様ありき。すなはち鶴亭秀賀、假名垣魯文、山々亭有人、柳水亭種清、二代目春水、笠亭仙果等の著作は、其脚色より見れば、讀本、草雙紙の舊型を脱せず。其思想より見れば、勸善懲惡の樊裡を出でず。其文辭より見れば馬琴、春水、三馬、一九の糟粕を嘗むるのみ。殆ど一人の新機軸を出して是圈套を穎脱したるものあらざりき。是れ主として時勢の文學を要せざるの結果なりと謂ふべし。若し夫れ明治四五年の交、魯文の滑稽物が當時の小説壇に獨歩したりし事實は、當代の粗笨なる人心が如何に眞面目なる文學を味ふに堪えざりしか。又維新前後の創痕につかれたる國民が如何に鄙俚なる諧謔の中に其鬱悶を慰めしかを想見するに足る。其西洋膝栗毛、胡瓜圖解等は西洋文明に眩倒せる當代人心を倒

照するの鏡として見ることを得べし。英國主義の第一の唱道者たる福澤諭吉氏が其功利的學風によりて舊弊を打破したる功績は、頗る痛快なるものあれども、其一種の新文牀を創始して明治の時文に一生命を開きたるの外、殊に純文學に直接の關係なかりしが如し。魯文の作と共に一時流行せし、松村操氏が戊辰前後の戦争談の如きも、小説史上の事實としては殊に言ふに足らず。

然れども、他方より社會の狀態を観察すれば、進歩改善の跡着々見つべし。政府は明治二年を以て、府縣に令して小學を設け、昌平黌を大學にし、四年文部省を置きて大に教育制度を改善し、士官、農、商、百工、技藝より法律、政治、天文、醫療に至るまで皆其學校有らざるは無し。外に對しては盛に海外留學生を派遣し、内に向ひては大に官費の學生を募集したる等、政府事業としての教育は頗る務められたりと謂ふべし。又定期刊行の新紙大に起り、多少文學に關するものも無きに非ず。西洋書籍の翻譯、亦盛に續出せり。即ち福澤、中村二氏の著譯を初として、歴史には萬國新史、泰西通鑑、地理風俗には輿地誌略、西洋新書、西洋見聞錄、修身倫理に關しては勸善訓蒙、政事科學には眞政大意、立

憲政、躰略、萬國公法、道理圖解、博物新編、天變地異、人身窮理等一々枚舉に遑あらず。殊に中江兆民氏が譯にかゝるルソーの民約論の如きは、一時大に社會に流行し、民權自由は少しく新智識を有する輩の間に套語となれり。語學、殊に英語學も亦漸く榮へ、バックル、ギゾーの文明史は、博く學者の間に讀まれたり。又他方には、洋學の大流行に反對して國學神道の再興あり。久しく徳川幕府の下に殘酷なる待遇を忍びたる、所謂平田派の皇學は、今や極端なる開進主義の反動として、一部の人心を風靡するの勢を得、和文の研究亦隨て復興せり。

是れ明治十年以前の狀況なり。見るべし、今や我邦は物質的改革の急務を了して、方に漸く思想界の改革に着手したることを。是れ純文學發達の過程に於て欠くべからざるの階段なり。然れども詩歌小説の上に於ては未だ著しき影響を見ず。僅に魯文、應賀一輩の著作が、小説史上に一縷の光明を保ちしを以て之を見れば、『議論より實を行へなまけ武士』的感情は、尙舊に依りて社會の思潮を支配せしならむ。明治十年に於ける西南戦争は、直接には何等恒久の勢力を文學の上に有せざりしに似たり。國民は尙其制度

組織の改善と共に、國民的思想の固定に忙しく多く純文學に關心するの餘裕を有せざりき。蓋し國民的思想及感情の一定せるものあるに非ずむば、所謂國民的文學は成立するを得べからず。維新このかた、英國思想に乗じて改革の途上に突進したる我國民は、今や殆ど撰譯なく收容したる諸種の異質文明に食傷せり。保守と進歩と、外國と内國と、政治、宗教、學問の上に於て互に相格闘せり。而して是等の衝突軋轢を調和し、同化する所以の唯一の勢力たるべき國民の性情は、世界的智識の欠乏の爲に未だ自覺の域に上らず。あはれ、是の如き時に於て聰明なる國民に安慰娛樂を供する文學はそれ如何にして生起するを得べき。

當時の小説は主として繪入新聞の續物として表はれたり。其主なる作者は、花笠文京、高島藍泉、染崎延房、條野傳平、古川魁雷、伊藤專藏、須藤南翠、渡邊義方、宮崎夢柳、小室案外堂諸氏なり。然れども今日見るに足るものとは絶へて無し。是等作者の小説を掲載せる新紙の主なるものは、東京繪入、繪入自由、繪入朝野、自由の燈等なり。但自由の燈の掲げたる宮崎、小室諸氏の小説は、多くは民權革命を鼓舞する西洋小説の翻譯、若くは翻譯にして、當時政治界の暗濤たる風

潮を伺ふに足るもの、他の群作家のと自ら其越を異にせるものありき。

この頃に前後して泰西小説の翻譯切りに出でしは、頗る注意すべき事實なりとす。其二三を擧ぐれば、織田純一郎氏の花柳春話を魁として、關直彦氏の春鶯囀、藤田鳴鶴が擊思談、其他春窓綺話、梅蕾餘薫、經世偉觀等、他にも少からず。多くは其原書をリットン、スコット、デイスレリ等の英國近時の歴史小説の中に求めたりしが如し。而して其譯者は概ね時の政論家にして、やゝ文字あるものにして、専ら文學に従事するもの非ず。蓋し是等の人々は、當時の最も教育ある讀者を代表せるもの、其頭腦の西洋文明に薰染しそめてより、在來及び當時の小説の荒唐陳腐なる、到底其進歩せる嗜好を満足する能はざりきを以て、茲に指を外國小説の翻譯に染めしに至れるなり。主として其資をリットン一輩の歴史的、はた政治的小説に藉りし所以の者は、其譯者が政論家たりしこと素より其直因を爲せしなるべしと雖も、そも、又當時社會の文學嗜好の幼稚粗大なる、未だ人情人生の精彩妙相を描破せる寫實的、はた心理的小説の旨味を鑑賞すること能はざりに依らずむばあらず。然れども其舊小説の陳套に滿

是、從來のとは異なりたる新しき或物によりて、其慰藉と娛樂とを求めむとするの進歩的傾向は、たしかに是翻譯小説流行の現象に表はれたり。

譯て當時社會の狀況を察するに、維新このかた引續きたる改革の精神も漸く靜穩中正に傾き、無謀なる進歩と、頑迷なる保守とは、互に自他の長短を覺識すると共に、十有餘年の仇敵は漸く其舊怨を解きて一堂に握手するの道に近けり。民約論的急進派も、彼我國情の差別を覺りて自ら戒省し、皇學的守舊派も世界の大勢に鑑みて漸く其反動の氣焰を收むるに至れり。同時の科學哲學のひらけゆくと共に、國民思想の範圍亦一層の廣きを加へ、英佛獨諸國の語學研究の進歩につれて、泰西文學の知識亦たますます國民の間に播布せるを見る、而して今ヤスコット、リットンの譯者によりて、外國小説の規模結構の巧妙自然に近く、思想文章の精緻高尚なる、遙に本邦小説に卓越するものあるに驚きたる文學社會は、猛然として深く自ら省みる所あり。是に於て小説革新の機運初めて動く。柴東海が佳人の奇遇。末廣鐵腸が雪中梅、花間鶯。藤田鳴鶴の文明東漸史。乃至少しく後れて矢野龍溪が經國美談等は、實に是風潮に乗じて出でたるものに外ならず。然れど

も是等の著作は新好尙に對する一定の見地と明確なる意識を以つて現はれたるものに非ずして。單に在來小説の欠陥を補はむとするの消極的煩悶に過ぎざりしに似たり。是時に當り東西文學の比較研究によりて我小説の過去現在を觀察し、詩學若くは美學の脚地に立ちて、在來の作家を論評し、且小説の性質理想を説きて、併せて將來の方針を指示し、以て我小説の史上に一新時期を劃したるもの、之を春のや主人坪内逍遙となす。明治の小説は逍遙を以て過渡の時代に入れり。明治初年より其十八年に至る吾等が所謂第一期に於ける紛々たる小説は、汗牛充棟も管ならずと雖も、概ね徳川時代の遺風を紹襲し、馬琴種彦の荒唐を學ぶものに非ず。むは、一九春水の鄙俚に倣ふもの。然らざれば、西洋小説を摸して生吞活剝に陥れるもの。明治時代の小説として見るに足るべきもの殆ど之れ無かりき。逍遙一度は出で、其小説神髓と書生氣質とを著して勸懲主義の誤謬を極論じ、寫實小説の嚆矢を開きてより一世靡然として之に起き。小説壇の旗幟爲に一變せり。是れ素より時勢のよのづから然らしめし所なりと雖ども、そ又世を擧げて舊習の夢中に困睡し一人の能く舊圈套を顛倒する者無き時に當り滔々たる時に逆ひて一

世の木擗となりたるは、逍遙其人の識見亦非凡倫を絶えたるものあるに因らずむはならず。蓋し氏の如きは百世ノ下永く我邦文學史上に於て獨得の位地を有すべき者なり。

小説神髓は一部ノ小説論なり。小説の變遷、主眼、種類、裨益より、立案、性格、描寫の方法に及ぶ。其主意とする所は、前にも言へる如く、馬琴以來我小説作者の金科玉條としたる勸懲主義を打破して寫實を奨説するにあり。其小説の主眼を論ずるや、先づ小説の主眼は人情にして世態風俗これに次ぐと喝破し、是人情の奧秘を穿ち心裏の活動を描寫して、周密精到ならむは小説家の本務なりとし、和漢の稗官者流がひたすら脚色の骨髄に入らむことを務めて、寫情の皮相に止るを憂へず。之れ眞の小説と謂ふべからざるを説き、更に一步を進めて

それ稗官者流は心理學者の如し。宜しく心理學の道理に基づきて其人物を假作るべきなり。苟にもちのれが意匠を以て強て人情に悖戻せる、否心理學の理に反れる人物などを假り出さば、其人物は已に既に人間世界の者にあらで、作者が想像の人物なるから、其脚色は巧なりとも、其譚は奇なりといふとも、

之を小説と謂ふべからず。

となし、曲亭の八犬傳と例證して其説を敷衍せり。曰く

彼の曲亭の傑作なりけるは八犬傳の八士の如きは、仁義八行の化物とて決して人間とはいひ難かり。作者の本意もどよりして彼の八行を人に擬して小説を爲すべき心得なるから、あくまで八士の行をば完全無缺の者となして勸懲の意を寓せしなり。されば勸懲を主眼として八犬士傳を評するときには、東西古今に其類無き好稗史なりといふべけれど、他の人情を主眼として此物語を論ひなば、瑕無き玉とは稱へがたし。其故を如何にとならば、彼の八主公の行を見よ。否其行爲はとまれかくまれ肚の裏にて思へる事だに徹頭徹尾道にかなひて曾て劣情を發せしこと無し。矧や一時瞬間と雖も心猿狂ひ意馬跳りて彼の道理力と肚の裏にて闘ひたりける例も無し。よしや堯舜の聖代なればとてかゝる聖個の八個までも相並びつゝ世に出でむこと、殆ど望みがたき事ならずや。

又小説者作たるものは専ら意を心理に注ぎ、假作の人物と雖も一度篇中に出でたる以上は、之を活世界の

人を見做し、其思想感情を寫し出すに敢て自己の意匠に任せて善惡邪正の情感を挾むことを爲さず。只傍觀して其自然の狀態を摸寫するを主とすべしと説きて、寫實以外に小説無きを示し、更に勸懲小説を貶し、摸寫小説を掲げ、『摸寫主意の小説に求めずして諷刺諷誠の法そなはり、暗に人を教化するの力あり』となし、『我邦の小説作者はこゝらの道理をさとらざるにや、ひたすら等翁が語を誦とし、小説といへば必ずしも事を凡折にとりて意を勸懲に發せざれば叶はざる事のやうに思ひて、獎誠といふ摸型を造りて強て趣向をそのうちにて工風なさまくなしたり。いとも嗚呼なるわざならずや』と論斷せり。

是の如きは小説神髓の唱道せる新旨義なりき。其説く所必ずしも正鵠を得たりと謂ふべからず。其寫實の意義の偏狹に失したる、傳奇及ノベルの並立を認めざる、心理的描寫を過重したる、又心理的描寫の適用せられべき小説の如何なる種類なるかを究めざる、理想小説の眞價を認むることを欲せざる、今日より見れば疑はしきふし少からずと雖も、是れはた舊來小説に對する反動として已むを得ざるの弊なりしならむ。若し夫れ、淺近なる勸懲の定型を株守し、善惡應報の圓滿な

る結局を須要とし、其人物も事件も徒に抽象形式に拘泥して具象自然を抛却せりし當代の小説界に對し、寫實と自然との重すべきことを訓へ、心情内部の陰密なる過程を穿鑿することの、外界事件の慘憺たる經歷を描くことよりも、遙に小説の躰を得たるものなることを示し、我昏々たる小説界をして十九世紀文學思想の曙光に接すると得せしめたるものは實に是小説神髓を以て破天荒となす。

書生氣質は逍遙が小説神髓説くところの理論に本きて、寫實小説の紛本を世に出せるものと見ることを得べし。されば是小説は、其審美的價値は措て問はざるも、明治小説の新紀元を開きたる過渡時代の産物として極めて重大なる歴史的意义を有せるものと謂はざるべからず。逍遙著はす所の小説、尙妹と春鏡、内地雜居未來の夢等の數種あり。皆書生氣質と均しく、寫實を主とせるものなり。

逍遙一度筆を寫實小説に染めしより、名聲倏ち都鄙に喧傳し、其例を學び其跡を追ふもの、亦比々として輩出せり。是に於てか舊來の小説は頓に其影を潜め、世又勸懲を言ふもの無きに至れり。文躰に於ても從來の馬琴、春水、三馬、等の舊套を襲ふもの少く、寫實に相

應はしき種々の新弊を創むるものあり。明治小説は是の如くにして其二期に入れり

第三 明治小説の第二期

明治小説の第二期は、一言すれば寫實小説の全盛時代なりと謂ふを得べし。二十年より二十八年の頃に至る前後凡そ十年に跨る。

是寫實小説の系統を尋ねれば、前章にも一言せし如く、遠く其源を元祿時代の浮世草子に發し、中ごろ傳奇小説の爲にけあされて、三馬、春水、一九等の戯作に於て僅に其餘を止めしを省きては、明治十八年頃までは殆ど其形影を存せざりしが、坪内逍遙が小説神髓出でてより、俄に其勢を得、忽にして化政以來小説壇を壟斷したる傳奇小説を壓倒して、優に文學世界の重要な勢力と化し來れり。言ふまでも無く傳奇小説も亦西洋文學の影響によりて多少改善の效を奏し、一部の社會の嗜好を繋ぎしもの無きに非されども、勢甚だ揚らず、到底寫實小説に對壘して相拮抗する能はざりき。二葉亭四迷の浮雲は是時代の先鋒として顯はれたり。逍遙が書生氣質は、其根本的精神は素より寫實的なりしが、其文辭、意匠等に於て多少舊傳奇小説の風あり

しが、『浮世』は則ち然らず。其思想、文字共に全く舊態を脱し、眞個新時代の産物なるの觀あり。即ち人物の性情を主として脚色を主とせず、故に其規模、結構に於ては從來の作に比すれば、遙に狭少なれども、而かも事皆人情の自然に基けるを以て、宛然一個の有機體を爲す。夫の強て理義を牽索し、附會杜撰の趣向を專とするものに較ぶれば、其優劣の差、決して同日の論に非ざるなり。

越て二十一年、硯友社の一派、其機關雜誌『我樂多文庫』を發行し、盛に創作の筆を執れり。硯友社は當時明治時代の教育を受けたる青年文士の會合にして、其社員は概ね英語、若くは獨乙語を解し、多少西洋學にも曉通せる才子なり。されば彼等の作爲せる小説は、おのづから彼邦の風尚を貴び、敘事、寫景より文辭、記號に至るまで、主はら洋風を模寫するに至れり。さしも寫實的傾向の旭日の勢ありし當時なれば、其作殊に青年讀者の間に行はれ、硯友の一社は暗に文壇の梁山泊を以て目せられき。其牛耳を執りしものは尾崎紅葉にして、川上眉山、巖谷漣、渡邊乙羽、江見水蔭、石橋思案等、後年隆々の聲名を文壇に馳せたるもの多し。是社より出づ。されば硯友社は實に明治小説史に於

ける一大勢力なりと謂ふべし。

同じ年に山田美妙が『夏木立』出づ。こは武藏野、柿山伏等、三四の短篇を合綴したるものにして、其文章は、硯友社一派と均しく、言文一致体なり。是書載するところ、意匠斬新にして文字亦瑰奇富麗を極む。其景物を叙するや、盛に聯念、照織の巧を盡して之を脩飾し、切りに直喩、隱喩、若くは間々活喩等を使用して讀者奇を好むの心を樂ましむ。若し夫れ其想に至りては、遂に浮雲の渾然自然に近きに及はざること甚だ遠し。然れども美妙の名是より人の知る所となり。

硯友社及び美妙の作出で、より、言文一致を學ぶもの漸く多し。美妙が國民之友附録に掲げたる『蝴蝶』紅葉が新著百種に掲げたる『色讖悔』皆之れ二氏が當年の傑作、一時世人の喧傳せし所のもの、而して其文脉を問へば、何れも言文一致体ならざるは無かりき。そも、是の如き異様なる文脉の起りたるは何故ぞや。蓋し文脉は思想によりて規定せらるゝ形式なり。今や我文壇は古來未だ曾て有らざりし一種特殊の思想を経験せり。如何にして是自然の情想をありのままに描寫することを得べきか。寫實的小説は時尙の赴くところ、如何にして寫實することを得べきか。古來の文脉は粗

笨に非されば緩漫、未だ縈紆九回の情理を曲盡し、寸錙分朱の精微を描破して、其眞に迫り實を盡すこと難し。果して然らば、吾等は如何にかして他の新しき、かゝる目的に適應して遺憾無き、文脉を求めざるべからず。言文一致体は即ち是目的に對する一の試験に外ならずりしなり。是文脉は年を追ふて圓熟に赴き、今日尙小説の一文脉として生存し、國文の範圍爲に一層の廣衰を加へ得たり。紅葉美妙諸子が創始の效業、決して没すべからざるなり。

然れども言文一致体は、動もすれば含蓄餘情に乏しく、簡淨輕妙の姿少し。圓轉自在は則ち之れ有り、雖も、風韻雅致は即ち未だし、加ふるに、語尾句末、常に單調に流れやすきにつれて、自ら強健奇拔の風を欠く。且通常の談話に近きを以て、品位足らずして卑近に陥り易し。是に於てか言文一致体の弊を認めたるものは、更に之を補充するに足るべき新文脉の工夫に苦心せり。之れ紅葉露伴二子が西鶴調に基ける一種の雅俗折衷体を創造したる所以なり。是れ西鶴的文脉が婉曲暢達にして而かも適勁に、文字淺近にして而かも餘韻あるは、尤も社會的、はた平民的の事物を直寫するに適當するが爲なり。露伴が風流佛、及葉末集、紅葉が伽羅

枕、三人妻以下の作、多くは西鶴躰によれり、是より

言文一致躰漸く衰へて西鶴躰漸く行はる。

文躰に於ける西鶴調の流行は端なくも元祿文學の研究を催起せること、及びそが更に我小説に及ぼせる影響の如何は、歴史上頗る注意すべきことならむ。心、形を

制するが如くば形亦た能く心を制す。夫の筆を執れば書を思ひ、絲竹を執れば管絃を思ふは、すべての事物

に於て當に然るべき所なり。元祿文學の研究漸く熟し、老西鶴の輕妙なる文致のいたく我小説家を感動せしめ

しや、又そが花柳色情の社會を通じて人間の煩惱界を描きたる銳利なる寫實の筆に味ひしや、更に又之れを摸

倣擬似して文情の相應はしからむを求めしや、彼等は果して知らず識らず西鶴的思想の誘致する所とならざ

りしか。吾等は少くとも紅葉に於て強ちに然らずと否む能はざるを認む。見よ紅葉の傑作と稱せらるゝ伽羅

枕、二人女、三人妻等の如き、其文躰の尤も西鶴的にして鍛鍊を累ねたるものは、皆之れ花柳の痴情、肉慾

の世界を寫して、尤も西鶴的なるものには非ざりしか。然るに降りて二十八九年の彼が作は、文躰に於て全く西鶴を離れたると共に、意想に於ても亦全く西鶴を

離れたるを見すや。されば吾等は紅葉當年の傑作が、

女に於て西鶴的なるを問はず、只其想に於て其然るを悲まざるはあらず。

若し夫れ露伴は紅葉と等しく寫實の流を汲みて、而かも其趣を異にすること、猶同じく西鶴に私淑して其文

那の如く異なるが如し。紅葉の小説は、主として無意にして當眼の事物を觀察し、性に近きところに隨て之

を筆に上ぼす。若し紅葉が假作的人物に於て作者たる彼の面かけ映れりとせば、それは彼が狹隘なる主觀の倒

影ならむのみ。必ずしも一定の意志を挾で性を造らざるに似たり。露伴は則ち然らず。聞説らく彼嘗て人に語

りて曰く、人あの一特色無かるべからず。物に觸るゝ毎に化せられて自己の特質を沒了し、彼の紺色の如

き曖昧雜駁の色となり去るが如きは、人の屑とせざるべき所なりと。惟ふる彼が著作はおしなべて是一種の

個人主義に據りて製作せられたるには非るか。吾等の見る所を以てすれば、子が作には常に一個の觀念と名

くべきものを有す。例へば風流佛の如き、一口劍の如き、はた又五重塔の如き、皆之れ殆ど同一のモータル

を以て之を貫けるものには非るか。即ち一念の強さは岩をも穿つべし。一念にして屈せず、撓まされば、外來の勢力又吾を奈何ともすべからず。精神一到何事か

成らざらむ、の意を鼓吹せるものと見るを得べからざるか。是の如く意を重ずるは、子が作に於て見遁し難特色なり。是を紅葉が作に比すれば、や、單調一律の嫌無きに非ずと雖も、其一條の生氣全篇を通じ、凜平たる道念の犯すべからざるもの存するの點に於ては、夫の散漫なる、若くは狹隘なる、主觀的寫實に比すれば、寧ろ遙に優れるものありと謂はざるべからず。然れども子が作特色あり、圭角あり、其文跡亦ま、儉奇解し難きものありしが爲めか、一般社會の嗜好は紅葉に比すれば遙に其下にありしもの、の如し。とにかく廿五年の頃に至るまで紅葉は寫實小説の高潮に觀し、殆ど一世の風尚を占斷せるの觀ありき。

是時に當りて傳奇小説は、紅葉、露伴の氣勢に避易して一時其顔色無かりきと雖も、其命脈は決して絶えたるに非ず。須藤南翠が照日葵、黃雛鷗、臘月夜、宮崎三昧が桂姫、末廣鐵腸が南洋の波瀾、村上浪六が三日月、女の助。並に矢野龍溪が浮城物語は、遙に經國美談の系統を紹きて、暗に寫實小説に對峙せりき。傳奇小説に與するものは、當代の寫實小説を以て規模褊僻にして雄渾跌蕩の姿無しとなし、寫實小説を贊くるものは、以爲らく形骸の大なるもの精神必ずしも大なら

ず。性情の幽微を盡したるものにして、初めて大小説と謂ふべしと、當時の世評は概ね寫實派に傾き、未だ二者各々獨得の長所を有して、永く小説界の双關たるべきものなるを覺るに至らざりしに似たり。

遮莫。さしも全盛を窮めたる紅葉一流の寫實小説は今や漸く衰頽すべき機運に迫りたり。そは所謂寫實小説其物の凋落せるにはあらずして、當時の小説に現はれたる、言はれ、似而非寫實が、自家破滅の原因を其中に包藏したればなり。真正の寫實は無私無我なること、須らく大自然の如くなるべし。彼に親しくして此に疎きことあるべからず。况むや己に近きものと揚げて己に遠きものを貶するをや。其絕對平等の見地に據りて世相物性を看破するや、眞假なく、美醜無く、理想として獎むるもの無く、非性として斥くるものも無し。渾然として天地の心に同化し、物と我と主客に於て隔つるところ無かるべし。是れ寫美の理想にして、詩人小説家は是境地に到りて初めて其圓滿を稱すべし。是の如き古來千百年にして一人無し。世の所謂寫美は單に自家の個性にして意識の中にあるものを除去し、冷然として等々の觀察を爲すものを謂ふ。よしや、意識的個性は務めて之を排くことを得べしとするも、個

人は遂に個人たるを免れず。自己の依て以て自己たる所以の性格、はた特質に至りては自我其物を滅却するに非ざるよりは、安ぞ之を解脱するを得むや。是故に人は遂に其主觀を離るゝこと能はず。意識的に純客觀的なるものも、無意識的には純主觀的なるを免れず。是意味に於てあらゆる詩人小説家は、其寫實的なる否とに關らず、悉く主觀的なりと謂ふを得べし。只是主觀の大小廣狹は其品等高下の別るゝ所以なり。

今夫れ明治二十年より二十五年頃までの小説家は、そが先頭たる紅葉を初めとして、多くは狹隘なる主觀を有せる寫實家なりき。其觀察いかにも従前諸作家の較ぶれば疑も無く自然、實際の域に近けり。又そが作意の中にもあらはに勸懲褒貶の意を寓せざりき。然れども是れ極めて褊窄なる主觀の眼孔を通じて見たる自然實際なりき。故に其作中に表はれたる人生世相は殆ど作家の主觀をば自己の貧少、且偏頗なる閱歷に照したる小人生觀に外ならざりき。是れ豈永く經驗教育ある世人の嗜好を繋住して、能く恒久なることを得べきものならむや。其無味放埒に浮艶淫靡なる製作に對して社會は漸々倦厭の色を示し來りたりき。村上浪六が所謂撥髮小説。黒岩涙香一派が探偵小説は是風潮の

前驅にして、泉鏡花、川上眉山、小杉天外等が所謂觀念小説は其後殿たり。是を明治小説の第三期に到るの變遷時代となす。左に其大勢を畧述すべし。

吾等の思惟する所によれば、所謂撥髮小説の一時非常の流行を極めしは、主として從來の寫實小説の柔弱平板、褊狹單調に對する一の反動なるべしと雖も、又其任俠剛毅にして而かも風流韻致に富める三日月次郎吉井筒女の助一流の人物性格の、いたく我國民の性情と調和するものありしに依らずむばあらず。蓋し任俠義に勇むは我國民の特性にして、夫の武士道なるものと其本を同ふす。一言の然諾を重じて甘じて身命を抛ち、苟も己を知るもの、爲には水火に入るを辭せず。瀾達物に拘らず、偶儻情に泥まず、而かも一度び感激すれば一念赴くところ鉄石を貫く。是れ豈我國人の愉快羨仰する所の人物にあらずや。夫の自由と云ひ、民權と云ふが如きは、嚴峻なる形式によりて組織馴致せられたる我社會人情と容れざる所多し。然れば、俠客勇士の事蹟は上下を通じて嘆美措かざる所なり。浪六は俠客傳の久しく中絶せるを提へて、茲に其奇矯遒勁なる筆を鼓して之を描く。寫實小説につかれたる讀書社會の滔々として一時之に謳歌したる、素より怪むに

足らざるなり。

然れども浪六の描くところ、千篇一律。文字の洒落、脚色の斬新を衒ひ、又情操の掬すべきもの少し。其人物も亦面に磊塊不羈を装へども、性格概ね卑淺に流れ、加ふるにまゝ淫猥面を掩ふものあり。文字亦杜撰孟浪、生硬を以て意氣となし、晦澁を以て餘情となす。されば幾もならずして名聲地に墮ちたるもの、素より其所よりと謂ふべし。坪内逍遙が當時『小説學校撥帳科の教則』を早稲田文學に掲げたるもの、善く其弊を抉摘して痛切なり。其二三條を左に轉載す。

一 本科の作家たらむものは、筆先にて人を殺すこと
練馬大根を切るが如く心得べきこと、總じて死、自殺、血、美女、意氣地、磊落、不羈などいふ想像を斷えず會頭に蓄ふべきこと。

一 總じて寛活なること、すむいこと、すばらしいこと、強いことに心を注ぎ、兼ねてやさしいこと、あはれなることに留心すべきこと、所詮剛柔の二面を常住の心得といたすべきこと。

一 『鬼の目に涙』、『一寸の蟲にも五分の魂』、『武士は喰はねど高楊枝』、『柔能く剛を制す』などいふ諺を、毎朝百遍づゝ唱へてよく服膺すべきこと。

一言葉使ひは、モサ言葉を男子の理想的とすれども、今更に死語を恢復すべきものにもあらねば、只精神を彼れにとりて今様の言様を用ふること。
一 總て奴といふ尾語を添へ用ひて、憎々しげに物すべきこと、『うぬ美人め』、『うぬ天人め』、『うぬ幸福め』、『うぬ風流め』、『うぬ文學め』の類なり總じて喧嘩口調をよしとすること。

撥帳小説漸く衰へて探偵小説行はれし頃>To 到りて、小説は其墮落の極に達したり。勢極まれば必ず變ず。文學社會は是に於て端なくも最も健全に、且最も多望なる風潮を小説界に喚起したり。何ぞや、歴史小説を求むるの傾向即是なり。

吾輩は茲に歴史小説に就て十分の意見を吐露するの違なきを恨どす。其性質、由來、及び是傾向の原因に到りては、他日詳述するを期すべしと雖も、吾等は今世紀の前後に跨りて歐洲各國の文學世界を振盪したる、所謂 Romantic の趨勢に似たるものあるを認めずむはわらず。佛蘭西の大革命、及び之に續きたる奈破翁の併呑主義に反對して、各國民族が其團結と平和を維持するの必要に迫りたるや、そが保姆となりて安慰と獎勵とを與へたるものは、所謂ローマンチク文學なりき。

彼は井ンケルマンよりグーテ、シルレル一輩に至るまで、多少感染するを免れざりし古代希臘の崇拜摸倣に反對して、中世紀に於ける羅馬民族の風尙を思慕し、當代社會の凋弊枯燥なる原野に、中古文學及び宗教の縹緲典雅なる花卉を移植せむと務めたり。是一種保守の反動が、パイロン一輩の新思想に打破せらるゝに至るまで、歐洲文藝の世界に及びしたる効果の見るべきもの、一にして足らざりき。シュレーゲル兄弟を初めとして、クライスト、シヤミツソ、ウーランド、リュツケルト等の獨乙に於ける。カラムシン、プーシキツ、レルモントフの魯西亞に於ける。マンツォーニ、レオバルヂの以太利に於ける。スコット及び湖上詩人の英吉利に於ける。はた又ラマルチン、ユーゴー、デヌーマの佛蘭西に於ける。皆是大潮流の所産に外ならざりき。今是を我邦に比ぶるに、事跡の大小素より同日の論に非ずと雖も、維新以來物質的勢力の増加は、我國民の詩的生活の範圍を削減し、人情は古代の敦厚温籍に遠かりて、日に刻薄冷淡に流れ、風俗も亦隨ひて淳樸を失ひて、漸く浮華に赴けり。社會の鏡たる文學は明に是を示しぬ。あはれ過ぎにし昔の慕はしきかな、已むなくむば今を捨て、古を取り、乾燥なる功利

の世に高雅なる古の人を現はせよかし。是れ意識的に、はた無意識的に一般社會が小説に對するの渴望には非ざりしか。似而非寫實小説衰へて撥鬢小説起り、次いで歴史小説出場を望みたるは、小説其物の性質自然の變遷なるべしと雖も、そも／＼又是懐古的風潮の暗流に乗じたるものに非るか。

然れども悲しきかな。明治二十七年の前後に於ける歴史的小説の渴望は、遂に醫せられずして已みにき。夫の瀧口入道の如きは、小説と云はむよりは寧ろ抒情的敘事詩として見るべかりき。村井弦齋、遲塚麗水、塚原斐洲諸子が作には、殊に言ふべきものあらざりき。是れ時か、勢か、又は機の未だ熟せざるが爲か。吾等つら／＼我邦の狀態を察するに後年に至りてローマンチク文學思潮が土を捲て再來するの時あらむか。明治文學の最盛期は蓋し其後に來らむ。

吾等は本論を敘述するに當り、饗庭篁村、森鷗外、須藤南翠、巖谷漣、森田思軒、廣津柳浪の諸子に及ぼざりしは、他の故あるに非ず。ローマンズとノベルとの消長は、明治小説史の大勢を決する主要なる事實なるを信したるを以て、主として是に着眼したるに因る。篁村は其思想、文跡に於て寧ろ守舊派に屬するもの。

代表的著作者として見るを得べし。之れ實に明治二十年なり。是に於て明治の小説は其第三期に入る。

吾等は茲に筆を擱くべし。觀念派の性質、欠點、其小説史上に於ける意義等は今茲に述べざるべし。觀念派の起りて後、小説界は如何に其局面を一變せしか。舊來の寫實家は如何に其影響によりて、心理的傾向を生ぜしか、深刻悲惨なる小説は何が故に特に是間に起りしか。幾多の新作家は如何なる氣勢に驅られて

其デビユーを爲したりしか。殊に明治の才媛故一葉女史の天才は如何に當代を風化せしか。抑、觀念派は如何にして衰へたるか。如何に社會問題に關聯せる新小説は起り來るべきか。社會問題と自然派と抱合せの結果、如何に壓世主義の文學を催起するの傾向あるべきか。明治の小説は是展轉側反の間に、如何に國民的性情に基ける國民文學を形成するの道に進みつゝあるか。是れ次に來るべき問題なり。他日を待て論述するの時あるべし。

(完)

博文館十周年紀念臨時增刊 太陽 第三拾貳號 終

本號ニ 定價金卅八錢 限リ

版權所有 太陽 定價

每月二日 五日廿日發兌

一冊 (三百頁以上)	金 拾七 錢	内地郵稅
六冊 (三ヶ月分)	前金九拾八 錢	一冊三錢
十二冊 (半ヶ年分)	前金壹圓九拾錢	外國郵稅
廿四冊 (一ヶ年分)	前金三圓七拾錢	歐洲十錢
		北米七錢

注意(本誌ハ前金ニアラサレバ一切發送セズ)前金切レ候節ハ直ニ 遞送ヲ止ム郵券代用一割増ニテ五厘壹錢切手ニ限ル

發行所 博文館

東京市日本橋區本町三丁目八番地

電話本局 三百三番

編輯人 岸上 大橋新太郎 發行人 敬利世 印刷人 愛敬利世

廣告掲載料

三等(五號活字 廿四字詰)

一行金三拾錢

全廿四行 六十四字

一頁金拾九圓貳拾錢

二等 一頁金廿三圓〇四錢 一頁金二十圓拾二錢